自由南アフリカの声
Voice of Free South Africa

2020年４月
No. 75

～１冊の本が人生を変える～

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会
Together with Africa and Asia Association（TAAA）

2020年３月の報告

- ■　2019年８月～2020年３月　国内にて、英語の本などを収集、分類・梱包作業
- ■　９月　南アにて司書教師研修会実施
- ■　９月～３月　12校に図書室設立　図書活動　学校巡回訪問
- ■　11月　本1万３千冊がTAAA南ア事務所に到着
- ■　12月　南ア事務所より平林薫、一時帰国
- ■　３月　国内メンバー　南ア渡航　現地視察訪問

目次

- 新たな地区で図書活動（平林薫）……2
- 学校図書室には“アナログ文化”が咲き誇っていた（大友深雪）……4
- 南アフリカを訪ねて（小泉信一郎）……6
- Kインターナショナルスクール、トラックいっぱいの本の寄贈（久我祐子）……7
- 2019年12月の作業と忘年会（野田千香子）……7
- サッカーボール寄贈を縁に対象校訪ねて（原山浩司）……8
- 活動日誌　……11
- 寄付金や本などを下さった方々……12

チョペラ小学校で本の分類をする生徒たち

先行図書活動の卒業生や司書教師も講師に
新たな地区で図書活動

平林　薫（TAAA南アフリカ事務所）

ウグ郡ドゥエシューラ学区の12校を対象とした図書活動は、日本NGO連携無償資金協力事業として2019年９月より開始となった。同学区での事業は今回が初めてということで、各対象校の状況や環境を把握し、地域とのつながりも深めながら活動を進めている。ドゥエシューラ学区はこれまで活動を行ってきたムタルメ地域の南側にあり、学校訪問の途中、ムタルメ地域のランドマークとも言えるムシカジ山が遠くに見えて懐かしくなる。ドゥエシューラ学区も沿岸部はサトウキビ畑が広がり、山間部は地域住民の村が点在しており、やはり近年は山間部から沿岸部への人口流入が激しい。学区内は失業率が高く、老齢年金等社会保障に頼って生活する家庭が多いことはムタルメ地域と同様である。

エムセニ小で本の貸し出しをする委員会の生徒

コンテナー図書室を新設

学校環境もムタルメ地域と大差なく、設備や教材が不足した状況が続いている。学区内の多くの学校には図書室がなく、“図書室らしき”スペースがあっても、室内は埃だらけで倉庫のようになっていた。図書室として改装するための空き教室がない３校（小学校１校・高校２校）には同事業よりコンテナー図書室を配備し、また、ひろしま祈りの石財団より小学校1校にコンテナー図書室を寄贈、コンテナー内に本棚を設置して学校図書室とした。スペースのある学校には本棚を設置して図書室の新規開設、もしくは再開設を行った。蔵書はTAAA寄贈と事業での現地購入を行い、多少の蔵書を持っていた学校は分類・整理をして本棚に設置した。かなり前にTAAAから州教育省図書部門（ELITS）を通して寄贈された本を箱に入れたまま大切に保管していた学校もあり、やっと本棚に納めることができた。対象校は小学校が多いことから全体的に小学校での蔵書が不足しており、昨年末に現地に届いた箱の中から早急に小学生用の本の整理と配備を進めている。

図書室運営のシステム作り

高校１校は数年前に新しく校舎を建設した際、独立した図書室も設置されたのだが、立派な建物内の本棚にはぱらぱらと本が置いてあるだけで、分類も利用も滞っている状況だった。まず図書室の設備や教材を整えることは最優先課題ではあるが、それを効果的に利用できるような知識の指導や、図書室運営のシステム作りへのサポートが何よりも大切であると感じている。ある程度の年齢以上の教師は、自身も図書室を十分に利用した経験がないため、学校図書室の意義や有効性を理解していないケースが多い。事業担当として活動を進めて行く司書教師には、自らも読書をして本への興味・関心を持ち、生徒への読書推進を行ってもらえるよう、研修会での指導を行った。

先行事業の司書教師が指導

教師対象研修会は、事業開始直後の９月初めと事業の中間点である２月中旬に開催した。２月の研修会では、州教育省学校図書部門（ELITS）のンベレ氏からの推薦もあり、先行事業対象校イナラ小学校の司書教師であるクマロ先生に講師をお願いした。クマロ先生は自身の学校図書室での司書教師としての経験に基づいて指導を行い、出席した教師からは“とてもわかりやすかった・参考になった”との感想があった。また、同校の“何もない教室から現在

司書教師研修会で話すクマロ先生

の図書室（ビフォー・アフター）”の写真を見たことで、自分たちも頑張ろう、という気持ちになったようだ。研修会後に各校の司書教師のWhatsApp（ソーシャルメディア）グループを作り、図書活動の写真をアップしたり、情報交換をしたりしている。

高校図書委員だった現TAAAスタッフ

今回、事業担当スタッフの選考にあたり、ドゥエシューラ学区のザミサ学区長と相談して地域内の若者に機会を与えるべく呼び掛けを行ったが、残念ながら運転ができてプロジェクトの経験もある若者とは出会えなかった。事業開始後すぐに活動を進めて行く必要もあり、TAAA先行図書事業でファシリテーターの経験があるモンドリ・チリザさんに担当してもらうことになった。彼はムタルメ地域・ルトゥリ高校在学中に図書委員会メンバーとして活動の携わったという経歴から、TAAA図書事業が生んだ“成果”とも言える。対象校の校長会議や司書教師研修会の際にもこのエピソードを伝え、モンドリは自身の活動での経験も紹介した。すでに司書教師や図書委員会生徒から絶大な信頼を得ている。

司書研修会でグループワークをする教師たち

各校図書委員会生徒のやる気！

現時点で対象校全校に学校図書室の設備が整い、各校で校長・司書教師・生徒をメンバーとした図書委員会を設置し、図書室の意義・方針・ルール等を決定した。現地の学校は１月始まり、12月終了のため、昨年９月の事業開始時の図書委員会メンバーの中には卒業して別の学校に移ってしまった生徒もいたが、できるだけ複数学年からメンバーを選ぶように伝えていたことから中心となる生徒が残り、新メンバーへの引き継ぎを行い、１月から活動を再開した。各校の図書委員会生徒のやる気と、図書委員としての責任感には目を見張るものがある。

読書を楽しめる環境づくりを

学校にも家庭にも本がなく、読書を楽しむ機会のなかった生徒たちは、図書室の本に驚き、興味を示している。ただ、経験がないため、恐る恐る本を手にする生徒や、母語のズールー語と同時に英語も学ばなければならないことから、本や英語への抵抗を持つ生徒も見られる。今後、図書室において様々な取り組みを行う中で、そのような生徒たちも本への関心を深め、読書を楽しめるような環境作りを進めて行きたい。

都市部と遠隔地の経済格差・教育格差

ムタルメ地域の対象校でも同様だったが、ドゥエシューラ学区でも対象校一校一校の置かれている状況が全く異なる。日本では公立・私立の差はあるが、公立校であれば全国ほぼ同様の設備や教材が整っているが、現地では遠隔地より町の方が圧倒的に有利であり、校長のネットワーク力や政治力などで設備の改善が進む場合もある。また、学校は地域の中心であることから、地域の環境、地域住民（保護者）の生活状況や考え方などにも大きく影響される。生徒が小学校に上がる時点で地域や学校の違いによる大きな教育レベルの差があり、それは生徒の学校生活期間を通して改善されることはなく、そのまま社会における経済格差に直結している。

アフリカ母語も英語も、大切に

また、南アでは教育言語が悩ましい問題となっている。母語と第２言語である英語に関する問題は教育省側にも様々な見解があり、これだという解決策には至っていない。基本的には小学校３年生までは母語で授業を行い、４年生から英語での指導ということになっているが、そのために４年生以降、授業について行かれない生徒も出てきている。だからと言って、小学校１年生からすべての科目を英語で指導することになると、母語の読み書きがしっかりできなくなってしまう。現地では生徒が理数科目に弱いと言われているが、急に英語で問題を出されても“問題の意味がわからない”という状況である。

個人的な経験からは、英語が流暢に話せていわゆる“英語脳”になっているアフリカ人の子どもや若者は、態度や考え方、行動も“英語的”になるように感じる。言語は文化であることから、アフリカ人が母語を使わなくなると、アフリカ人のアイデンティティ（独自性）を失ってしまう可能性がある。特にアフリカ人が大切にするリスペクトの心（他に対する敬意）は絶対に失って欲しくない。英語が共通語であり、経済活動が主に英語で行われている南アでは、英語母語以外の南ア人は自らの母語と共に確実に英語を習得しなければならない。そのような状況を踏まえながら、バランスのとれた図書活動を続けて行きたいと思っている。

各対象校それぞれの校長先生や司書教師は知的かつ個性的でたくさん学ばせてもらっているが、時に対応に苦慮することもある（特に校長！）。ただ、図書委員会生徒との活動や交流はとても楽しく、彼らの能力や好奇心にしばしば驚かされ、私自身もモンドリも毎日の学校訪問をワクワクしながら行っている。そして、先行事業でIT指導員を務めてくれたジンシェさんが対象校のエムセニ小の教師となり再会できたことは大きな喜びで、これから一緒に活動を進めて行くのを楽しみにしている。

学校図書室には“アナログ文化”が咲き誇っていた

～2020年３月の図書プロジェクト視察訪問～

大友 深雪

2018年６月の現地訪問以来、１年半ぶりの南アでした。コロナ感染がアフリカにも広がり始めた時期で、３月１日の入国・11日の出国・帰国が心配され、断続的な「断水」と「計画停電」を経験して、南アそして地球の資源分配の行く末を案じながらの滞在でしたが、プロジェクト視察訪問は何とか無事に果たしてきました。

今回の主な訪問先は、2013年から2019年３月までクワズールー・ナタール州ウグ郡ムタルメ・トゥートン学区で実施した図書プロジェクトの応用的継承をめざした隣接のドエシューラ学区の12校の図書室でした。日本NGO連携無償資金協力による２年間事業として2019年９月から開始し、校内に図書室を作るスペースがない４校にはコンテナ図書室を設置（うち１校へは（一財）ひろしま・祈りの石国際協力交流財団より寄贈）、スペースのある８校では、図書室確保のための空き教室・校内倉庫などの大掃除・改装作業や本棚注文・備品設置を行ったり、改善・全面的模様替えを経て、全12校でスペースとしての図書室を整えました。

図書室の物理的セットアップと同時進行的に、図書委員会（図書司書教員２～３名と選出方法は各校一任の図書委員生徒原則８名で構成）の発足、委員会メンバーへの図書運営方法の手ほどき（蔵書受け入れ・記帳、図書分類法による蔵書整理、貸し出しルール等運営方針書作り、貸し出し帳・利用者記録簿作成、読書・自習スペース整備）、図書司書教諭への研修などが実施されました。12校中準備が遅れていた最後の学校で図書室お披露目テープカットや

コンテナー図書館の前で

前列中央 筆者

朝会での全校生徒への図書活動開始宣言イヴェントが行われたのが、２月末で、私たちの訪問時には12校すべてで、図書活動が始まっていたのです。

12校に絞ったことで可能になった現地プロジェクトマネージャーの平林さんと現地図書指導員のモンドリさんによるこまめな巡回訪問支援の大きな効果もさることながら、学校によって温度差はありながらも、教科書以外本を見たこともなかった子ども達の並々ならぬ好奇心・学習意欲・芸術的表現力並びに図書司書教諭や管理職の知恵・熱意・協力が結実した姿をあちこちで実感できた図書室視察訪問となりました。〈報告その２〉では、そんな姿のいくつかを紹介したいと思います。

校長さんが組合活動にも熱心で不在なことも多いという学校の図書室を訪問した時、一人の図書委員が新聞を抱えて図書室に入って来たので、どうしたのか聞くと、校長先生が図書室用に確保してきてくれたとのことでした。Funda Nathi（Read with us の意）と図書委員会が名付けたその図書室では、修理が必要な本を入れるBook Hospitalと可愛く名うたれた大きな箱が本棚の上に用意されているのが目にとまり、「なるほど」と感心しながらも、修理して送るべきか、送るのを断念するべきかで悩まされる日本での種分け・荷造り時のことが頭をよぎった瞬間でもありました。図書室に学校名ではなく独自の名前をつけているところが他にも２校あり、一つはBright Future Library、もう一つはVukukhanye（Wakeup Bright の意）というものでした。私たち訪問者にズールー語の名前を付けて楽しませてくれる現地の人たちの豊かな言葉文化に通じるものを感じました。

文化と言えば、本棚の上方や間の壁に図書委員たちが描いた絵には見とれてしまうほど魅力的なものもあり、訪問した丁度その時に、コンテナ図書室の天井に色紙を切りぬいた動物や文字を楽しげに張り巡らしている図書委員たちにも出くわしました。また、“It is my right to read”といった格調高い標語や、Children's Rights and Responsibilities とか Gender Issues とかの表題のついた長文のポスターが所狭しと掲示してあり、どこから手に入れてくるのか聞き損ねましたが、日本の学校図書室には期待できなさそうなその啓発性に注目させられました。

特に小学校では曜日毎に使用学年が振り当てられていて、教師付き添いで生徒に本を選ばせ、教室に持ち帰り、教室で読んで、返却するというシステムをとっていました。同じ本が数十冊あるワークブックやペーパーバック読み物は授業直前に教室に運んで副教材として使える制度としても活用できるものだと思いました。

平林さんの発案で８つの小学校に配布され、比較的低めの目につきやすい本箱の上に立てかけられた「日本語・英語対照衝立」は、来室者に人気があり、そこに例示された日本語表現をすべて覚えて話しかけてくる生徒や、英和・和英辞典が欲しい、日本の料理・調理や着物に興味があると言ってくる生徒や、ひらがなの模写に挑戦してくれた生徒に出会えて、日本・日本語への興味の広がりとスポンジのような吸収力に驚かされました。

図書委員会活動には８人のメンバーにボランティアが何人か加わっているところもあり、総じて女子の方が多いようでしたが、特に男性司書教諭がいるところでは、男子の活躍も目立っていました。３人（そのうち１人が男性）の司書教輸にも恵まれ、「言うことなし」の運営をしていたある中学校でのエピソードを最後に聞いてください。私たちがいる間ずっと他のメンバーとは少し離れて１人真剣に本の並びを整えている男性生徒に目をとめた久我さんが、「何を読んでいるの？」と聞いたところ「動物」という答えが返ってきたので、久我さんは、「動物が好きなんだ」と応じると「いや、嫌いです」と。「ではどうして動物の本を読んでいるの？」と久我さんならではの？ 再質問には、「本が好きでたまらないから」ということだったそうです。図書室はこんな生徒にとっての大切な生活空間にもなっていたのです。

図書プロジェクト訪問報告最終回では、日本での本の収集・種分けの際に役立ちそうな情報や現地でのミーティング等で話題に上ったことを羅列的に紹介しておくことにします。

★こんな本が欲しい

生徒・教員を含めてもっとあったらいいとしてあげたのは、絵本、世界地図、やさしめな読み物、算数・数学参考書、経済学、物理学、会計学、文学、聖書関連読み物、百科事典、詩集、演劇脚本、歌（特に霊歌）、現地語ズールー読本、教科書に沿った参考書で、最後の２種は、現地で調達してもらうものです。また、農業塾 MOATS ではリソースセンターに来る近くの大学生・専門学校生用に工学、ビジネス関係のものもあるとありがたいと言われました。

ドゥドゥズィーレ中で本の受け入れ登録をする

★注目すべき運営アイデア

- 図書委員会に SGB（School Governing Body）から保護者が１人参加（１校）
- 図書室利用を年会費制とし、年１回５ランドを払って、会員証を受け取り、利用時に提示するというシステム導入。会費は、日本からの支援終了後、自立した図書室維持費に充てる（１校）。
- 学校が休みの土曜日に特に１２年生用に開室時間を設定（高校中心に複数校）

★要対応事項

- コンテナ図書室の暑さ、寒さ対策
- 必ずしもうまくいっていない複数の司書教諭の連携体制改善

  図書委員会の会合や TAAA 現地スタフ巡回訪問の際には全員の参加要請を！
- 図書室に入ると「気取り屋」とみられるのを嫌って足が遠のきがちな高学年男子気風　男性司書教員を増やすなど？

★気になる南ア教育事情

- 生徒が抱える生活苦は様々あるが、「妊娠」による学業の中断は深刻。学校教育では性教育が行われておらず、教員は妊娠する生徒への対応なども含めてソーシャル・ワーカー兼カウンセラーの役目を果たさざるを得ず、良心的な教員はオーバーワーク気味。
- 今年は「読書年」と銘打たれ、就学前クラスから読書が奨励されているにもかかわらず、図書予算措置がない。今後さらに教育予算そのものが削減され、教員給与減額、生徒一人あたり×在籍者数で決まる各学校の予算も減額される見通し。使途別配分が決まっていて図書に流用するわけにもいかない。

南アフリカを訪ねて　～できることから～

成城高校一年　小泉 信一郎

今年の夏休み（7月13日～8月10日）に、南アフリカを訪れた。高校生になったばかりだったので、TAAAではなく、高校生のボランティアを仲介しているProjects Abroadという会社を使ってケープタウンでボランティアを行った。西ケープ州の保育園に行ったのだが、発展している都市部とは違い、郊外はまだまだ発展途上であったが、子どもたちとの触れ合いを通じて現地の雰囲気を肌で感じ、たくさんのことを学ぶことができた。特にタウンシップのお話を現地の人に教えていただき、そのあと実際にタウンシップの中を散策したときには、見るだけではわからない歴史や思いを知ることができ、良い経験になった。

TAAAのボランティア作業に参加

ここで、私とTAAAの関係について、話したいと思う。私は、2010サッカー南アフリカW杯から、南アフリカに興味を持った。ヨーロッパや私たちの住むアジアとは異なる雰囲気に魅了された。

2010W杯から数年後、母の知り合いで、TAAAメンバーの森直之さんの紹介で活動場所のすぐ近くに住んでいたこともあり、TAAAの活動に参加した。

最初に参加した時には、「楽しいけどよくわからない」という漠然とした感想を抱いていたことを覚えている。興味があることはとことん突き詰めるものの、興味がないとあまり積極的ではない私は、当時活動を詳しく理解していなかったことや中学受験があったこともあり、数回しか参加しなかった。中学生になると、学校の課題であった探究活動から、もともと興味があった南アフリカを調べるうちに、TAAAへの興味が湧き、活動に積極的に参加するようになった。

TAAAは、私にとって、居心地が良い場所である。私の性格とTAAAの理念がよく似ているのである。（もちろん、私のボランティアの考え方ともよく似ている。）「必要」なものを必要なだけ送る、生活を大事にし、自分たちにできることから支援をする、といった考え方を私はとても気に入っている。こうした（もちろんいい意味で）「緩い」支援が、気分屋でマイペースな私でも楽しく参加できる要因なのだと思う。

南アの保育園を訪ねる

そんなTAAAでの経験が、今回のボランティアで大きな役に立った。特に南アの保育園で本の整理を行った際の経験が心に残った。寄付によって集まった本を整理する作業を行ったのだが、そこで大量の本が積み上がっていて衝撃的だった。私がボランティアに行っていた園は、本が不足気味だったのだが、そこから歩いて５分ほどの園では、本が余っていたのである。近くの園は皆、本や玩具が不足しているだろうと予想していたが、逆に多くて整理しなければならないほどだったのだ。地域や自治体と協力して支援を行っているTAAAとは違い、自治体だけでなく、近隣の園とも協力していないことを知った。TAAAの自分たちの行動を現地の人たちの生活に結び付ける効率の良さを感じるとともに、このような状態の保育園をいつか自分が少しでも改善できればと感じた。

今回の経験から、南アフリカのことをより深く知ることができ、TAAAや自分自身の特長や課題について、よく考えることができた。これからの支援では現地の人のことを考え、TAAA同様に、無理のない範囲で、できることから行動範囲を広げていきたいと思う。

読み聞かせする筆者

保育園にて片付けの前と後

Kインターナショナルスクール
トラックいっぱいの本の寄贈

２月にケイ・インターナショナルスクール東京（KIST）から、大量の良質な英語の本のご寄附をいただきました。TAAA 会長の浅見克則と四ツ谷の学校にトラックで引き取りにいきますと、司書のスミス先生が満面の笑顔と“Thank you”と握手で迎えてくださいました。「ちょうど図書室を建て直す計画があり、本の処分に困っていたところだったんですよ。TAAA さんの手を通して、南アフリカで役立ててもらえるなんて、こちらこそお礼が言いたいです」と言われました。

図書室のある２階に上がると、すでに英語の本を詰めた段ボールの箱がたくさん用意されていました。事前にお聞きしていた量の２，３倍はあります。この箱詰め作業にどれだけの労力をかけてくださったのだろう、と感謝の気持ちがこみ上げてきました。 さて、２階から１階に降ろしてトラックまで詰め込む作業が大変です。どうしたものかと思っていたら、「もちろん、私たちも手伝いますよ」といつの間にか、数人の先生やスタッフの方々が集まってきました。「生徒を呼んで手伝わせたいのですが、今は授業中なので」 先生方は流れ作業で張り切って段ボールを運び、一気にトラックへ積み上げてくださいました。

２階の図書室から運び下す

私たちが南アに送る本は、たくさんの「ありがとう」と汗を通してバトンタッチされた贈り物です。

ケイ・インターナショナルスクール東京の皆さま、本当にありがとうございました。 （久我祐子）

2019年12月の作業と忘年会
一時帰国の平林薫といっしょに

前列右から二人目、平林薫（TAAA 南ア事務所代表）

12月もいつものように第３日曜日に、TAAA の作業場で、種分け、レベル別けした本、算数セット、サッカーボールを梱包し、ラベルを貼っていきます。ときどき、平林さんから「あ～、こんな絵本が欲しかった～。喜ばれると思う……」と声が上がります。

昼まで作業をして、近くのスーパーへ買い出しに。隣の小部屋で、鍋をつつきながら忘年会。締めて千円。平林さんの PC で現地の写真を見せてもらいながら、現地の活動報告を聴きました。写真の後ろの箱は、来年、南アへ出荷するまでに部屋の半分、天井に届く高さになります。

（野田千香子）

～サッカーボール寄贈を縁に対象校を訪ねて～

原山 浩司

長年、教師をされてきた原山浩司さんが TAAA の対象校を訪問されました。原山さんは昨年８月にみどり市大間々中学校に声をかけ、サッカーボールを集め寄付してくださいました。これは今回、ボール寄付先の学校を訪ねられた訪問記です。（編者）

南アフリカとの出会い

出会いとは、偶然ではなく、必然なのだろうか。あるいは、偶然を必然に変えていくものなのだろうか。いずれにせよ、人生を豊かなものにしてくれる鍵である。

2015年、SDGs（持続可能な開発目標）において、「質の高い教育」が掲げられ、誰もが平等に質の高い教育を受けられ、生涯にわたってあらゆる機会に学習できるようにすることが確認された。JICA（国際協力機構）によると、世界には6700万人の子どもたちが学校に行けていないと言う。

今回、私のアフリカ訪問のきっかけは、南アフリカ共和国ヨハネスブルグ日本人学校に３年間家族とともに赴任した年に、ネルソン・マンデラ大統領の就任式が行われている広場に行き、黒人たちの歓喜の渦の中で一緒に喜びを分かち合った。これが私のアフリカとの出会いの始まりである。

その後、学校に通うことのできない子どもたちとも僅かながら触れ合うこともできた。その頃から、私はいつかこの子どもたちのための支えになりたいと思い始め、今日につながっている。そして、自分の経験を生かすことのできる「教育」を視点に、現地に赴いて教育や子どもたちの支援にかかわる活動をしている日本人や現地の人たちと会い、それらの活動やそこに暮らす人々の生活を通して、具体的な問題点や自分にできることを探ってくることにした。

ケニアの施設を訪ねる

まず、最初に向かった場所がケニアである。

キテンジェラという町にあるサイディア・フラハは、1993年に貧しい子どもたちのために幼稚園を建設し、その後 NGO としてケニア政府より認可され、それ以降は児童養護施設、職業訓練センター、縫製工房、小学校を開設し、ケニアの子どもや女性たちを支援している。サイディア・フラハ以外では、障がいをもった幼稚園から中３までの子どもたちを対象とした国内でも非常に珍

しい私立の特別支援学校や地元で唯一の公立学校を見学した。

次に向かったのが、キリマンジェロの麓にあり、2010年に幼稚園と共に開校されたウシリカ・インターナショナルである。学校のあるロイトクトクという町は、就学が困難な子どもたちが多く存在し、そのために青少年の自立支援、教育環境の充実や貧困家庭の生活向上を目指して設立された学校である。また、貧困家庭・地域生活向上支援として、洋裁や家畜を飼育するなどして現金収入を得るプロジェクトにも取り組んでいる。

そして、ケニアで最後に向かったのが、ナイロビ北部にあるティカという町。その郊外にモヨ・チルドレンセンターの拠点であるニュー・ホーム（子どもたちの家）がある。

1999年に NGO として認可され、2005年に子どもたちの家を設置し、映画「チョコラ」が撮影された場所でもある。ここは身寄りのない子どもたちなど、支援の必要な子どもたちが生活している。また、少し離れた場所には、リハビリテーション・ファームがある。ここは、有機農法を学びながら、薬物依存になったストリート・チルドレンなどの若者たちのリハビリを目的とした施設である。

さらに、この地区最大のスラム街と言われている場所にも出かけた。土塀、板張り、トタン張りの住居（年代

順）が密集し、４万人が暮らしていると言う。続いて、タウンと呼ばれている繁華街にいるストリート・チルドレンの所に向かった。雑踏としている建物、人、車の間を通り抜け公園に出ると、４～５人がたむろしていた。するとそこに、12歳くらいの子がやってきた。「私のお腹に赤ちゃんがいるの。お金をちょうだい」子どもたちをこのような状態にさせたのは、紛れもなく大人たちであり、子どもたちはその犠牲者である。

サッカーボールを寄贈したTAAA現地学校訪問

今回、縁あって私の地元の中学校から使わなくなったサッカーボールを寄付してもらい、それがこのヒバディーンから30キロ程奥に入った学校で使用されていることを知り訪問した。同時に、TAAAが日本で集めた英語図書を近くの小学校や高校に配布しているということなので見学させてもらった。地方の学校には図書室がなく、教科書以外の本はほとんど見当たらず、本屋などもない。そのため、本を読む習慣はないと言う。また、南アフリカで人気のあるスポーツの一つはサッカーである。しかし、地方の学校にはボールがない所もあると言う。犯罪やドラッグに巻き込まれやすい環境でも、ボール一つあればそれが楽しみで、学校に行くという子どももいるそうだ。

NANI高校

TAAAの平林さんは、もう20年以上にもわたり南アフリカで活動をしておられる方で、今では日本と南アフリカをつなぐ存在である。大西洋岸からどんどん離れ、舗装されていない道を一時間ほど進んだところで、最初の訪問校であるNANT高に到着。この学校には、一年前から図書の寄贈を始め、既に1000冊に達しているそうだ。一日平均10人の生徒が本を借りていると言う。貸出帳もしっかりと備えられ、分類番号によって棚ごとに整理された本が並んでいる。図書室に案内された段階で、図書が有効に活用されていることが分かった。改めて本を入手することが困難なこの地域で、この活動の意義はとても大きなものであると感じた。

MBALENCANE小

次に、MBALENCANE小を訪問した。ここは児童数1000人の中庭がきれいに整美されている大きな小学校である。コンテナを再利用した図書室は、配布され始めたばかりであるために本の数は決して多くはないが、きちんと整理されていて図書への期待感が伝わってきた。

MGAMULE高

続いて、MGAMULE 高を訪問した。こちらもコンテナを再利用した図書室であり、その中には図書室の利用の仕方や貸し出しの決まり、図書の目的等がちょうど掲示されるところであった。図書委員のメンバーが自主的・意欲的に活動している姿がとても印象的であった。インターネット等の普及により、いつでも必要とする情報は手に入る時代となった。それが一つの原因となって、日本でも、特に子どもたちの図書離れや読書時間の減少が危惧されている。しかし、世界に目を向ければ、情報ネットワークの整備がされていなかったり、ましてやそのための機器を購入したりするなどが困難な現状が多く見られる。それを補うことができるのが図書（館）である。ケニア政府もそうであるが、「教育には力を入れていく」という。だとするならば、住民が教育や文化、産業などの課題解決につながる資料や情報に接する機会を増やしていくことを優先的に考えていく必要があると思う。そして、いつの日か日本の図書文化と現地の図書への情熱が融合し、新たな図書文化が子どもたちに成長につながっていくことを期待したい。

MEHLOMNYAMA小

最後に訪問したのが、MEHLOMNYAMA小で、サッカーボールが届いた先の学校である。日本の学校名が入ったボールでサッカーの練習風景を見学させてもらった。ボールを寄付してもらったサッカー部の顧問から、私が出

発する前にユニホームを預かった。そのユニホームをキャプテンの子が着てゲームをしている。約半年前に、我が家で空気を抜いたボールが、今は南アフリカの子どもたちに引き継がれ、子どもたちは笑顔で溢れている。とても感動的な瞬間だ。やっぱり世界はつながっているとつくづく思う。早く日本の子どもたちにも、この様子を知らせてあげたいと思った。

南アフリカは変わったか

アパルトヘイトが撤廃され、「これで南アフリカが変わる」と、誰もがそう思っていた。だが、どうなのだろうか。ダーバンの街中に行けば、ストリート・チルドレンを見かける。電気・水道の通っていない家。駐車場で声をかけてきた青年など。以前に住んでいた頃の南アフリカと比べ、何が改善されたのだろうか。夕方、ロッジのテラスで、一人の黒人青年がぼーっと大西洋を眺めていた。しばらくして、声をかけてみた。彼は笑いながら近くに寄って来てくれたので、「南アフリカは、どう」と、尋ねてみた。彼は、「政府は崩壊（collapse）している。あとは神に祈るだけだ」と答えた。彼は30歳代くらいで、子どもは5人いるが、仕事はあまりないと言う。「でも、マンデラは好きだ」と言ったのが、とても印象的だった。

この訪問を通して、教育という視点から見ると、個性豊かな校長先生のマネジメントで、これほどまでに学校の雰囲気が変わるものなのかと少々驚いた。南アフリカでも、教育委員会に近い組織はあるものの、これほどトップダウンで進められてしまうと、教師のモチベーションは保たれるのだろうかと少々心配した。同時に、学校格差が広がることで、子どもたちがもっている本来の個性や適性、将来性の芽が摘み取られてしまわないかと不安を感じたことも事実である。最後に訪問した学校では、子どもたちが斜面になっている場所を利用して、空中前転をやっていた。ジャンプ台は石だ。きれいに宙を舞っている子。頭から落ちて痛そうにしている子などさまざま。日本では、100パーセントありえない光景だ。ただ、経験から学べる知識や技能もある。その線引きの違いは、国によってこれほどまでに違うものなのかと改めて思い知らされた、でも、私はこの南アフリカで見た光景、決して嫌いではない。むしろ、私が幼少期を過ごした頃と同じで、とても懐かしい感じがする。

ヨハネスブルグに戻り、景色は何もかもが変わってしまったような気がする。変わらないのは、信号待ちの交差点で新聞を売る人、花を売る人、缶を持って金を求めてくる人たちの姿であった。

教育に望むこと

今回の訪問で、最も強く印象に残っていることは、子どもたちを直接指導する立場にある教員の育成だった。訪問したほとんどの学校で見られた教師の一方通行的な授業。換言すれば、子どもの主体的な活動があまり見られない授業マネジメントで、もっと子どもたちに考えさせたり、意見を交換させたりしながら、互いを理解し考えを深めていく場面が必要であると感じた。子どもたちの学ぶ意欲は高い。だからこそ、教師がもう一工夫できていれば、子どもたちの知識や経験はもっと深まり、主体的な生き方にもつながっていくはずである。

また、訪問した多くの学校では、国の教育方針の下、数学（算数）と英語にかなりの趣が置かれているように感じた。確かに、将来の仕事を見据えれば、これらの教科が重要な役割を担っていることは理解できる。しかし、教育は人格の完成を目指すものである。一人ひとりの個性や適性が埋もれてしまわないようにすることも学校や大人たちの役割である。また、日本でも、「社会に開かれた教育課程」の必要性が叫ばれているが、まさに「学習は学校の中だけでは完結しない」という方向性をしっかりと打ち出し、家庭や地域を巻き込み、学校での学びを実際の生活や実社会とどうつなげていくか、そのような点を改革していく必要があると感じた。きっと、10年後、20年後には、違った国の姿が見えてくるはずだ。そして、それこそがSDGs（持続可能な開発目標）の目指す教育の姿ではないかと思う。

日本人学校に勤務した時、マンデラ大統領の就任式が行われている広場に行ったことがきっかけとなり、学校に行けない子どもたちと出会うことにつながった。彼らとの出会いがあり、私はいつかこのような子どもたちの支えになりたいと思うようになった。約30年にわたる日本での教職生活を終えても、それが私のゴールではなく、次の目標へのステップとなっている。今回の訪問は、その一段である。

私は、この出会いにとても感謝している。

主な活動　（2019年8月16日～2020年3月15日）

【日本国内】　TAAA会員とボランティア

8/18　本の梱包作業　浅見克則　大友深雪　野田千香子　西村裕子　高宮康次　大橋温子　小泉信一郎　長江隆友　黒田洋子　黒田咲良　熊谷雄三
8/22　日本NGO連携無償資金協力贈与契約　締結　久我祐子
8/26　本をトラックで作業場に搬入　北爪健一
8月～3月　本などの受け取りと保管　北爪
8月～3月　ホームページの更新など　渡恵美子
8月～12月　広報　報告会準備　丸岡晶
8月下旬　会報送付のためのラベル変更・出力　西村裕子
8月～9月　会報74号編集・校正　野田千香子　西村
9月　会報郵送準備　高野千恵美
9月　会報発送準備と発送　野田
9/6　会のML移行作業　久我
9/15　梱包作業　関根章博　大友　久我　高宮　高野　大橋
9/27　SB Heart訪問　サッカーボール寄附お願い　久我
10/4　荷物搬出作業　本の分類作業　野田　大友深雪
10/9　(一財)ひろしま・祈りの石へ第2四半期報告書　久我
10/20　本の梱包作業　野田　大友 西村 久我 丸岡 高野　高宮
10/29　(株)モルテンとミーティング　久我
11/17　本の梱包作業　浅見　野田　久我　小泉　高野
12/3　(株)モルテン塚田さんとのミーティング　組み立て式サッカーボールについて　久我
12/5　ミーティング　図書事業について　久我　平林
12/6　本の分類作業　放送大学教員、学生のインタビュー調査に対応　久我　大友　野田
12/15　梱包作業、忘年会、ミニ報告会　平林薫　浅見克則　久我祐子　野田千香子　高宮康次　大友深雪　小泉信一郎
12/20　ミーティング　図書・菜園事業について　久我　平林
1/10　ひろしま・祈りの石　へ第3四半期報告所提出　久我
1/19　梱包作業　大友　浅見　大橋　高宮　野田
1/22　ひろしま・祈りの石助成申請書提出　久我
2/10　全国のインターナショナルスクール宛てに手紙作成（英語の本寄贈依頼）久我　高野　西村
2/16　本の整理とインターナショナルスクールへの手紙郵送備　丸岡　浅見　大友　野田　久我　高宮　小泉　高野
2/20　JICA東京　今後のMOATSについて　久我　大友
2/26　ケイ・インターナショナルスクール東京へ本引き取り　浅見　久我
2/26　N連中間報告書提出　久我
3/2～10　南ア現地視察訪問　久我　大友
3/6　本をトラックで作業場へ搬入　北爪

【南アフリカ共和国】　平林薫と南アフリカのスタッフ

8/19　州教育省図書部門（ELITS）ンベレ氏とN連事業に関しての会議
8/20　州教育省ドゥエシューラ学区ザミサ学区長とN連事業に関しての会議
8/22　ムナフ小図書イベント出席
8/25～30　本の仕分け、学校別寄贈用箱作り、モンドリとスタッフ会議
8/29　N連事業に関してモンドリ、農業塾メンバーと月例会議
9/2　ドゥエシューラ学区対象校の校長ミーティング
9/3　州教育省図書部門(ELITS)ンベレ氏と司書教師研修会に関しての会議
9/4～5　学校巡回訪問、研修会お知らせ配布
9/6日　第1回司書教師対象研修会開催
9/9～13　学校巡回訪問、各対象校の図書室状況の確認
9/16～20　学校巡回訪問、各対象校の図書室状況の確認
9/26　農業塾メンバーと月例会議
9/27　ポートシェプストン図書館でミーティング
9/30　モンドリと次期活動計画・準備
10/1～4　学校訪問、本の配布、図書委員会生徒研修
10/7～10　学校訪問、本の配布、図書委員会生徒研修等
10/11　ムタルメ地域前対象校3校訪問、図書活動状況確認
10/14～18　学校巡回訪問、図書委員会生徒と本の受け入れ登録台帳記帳作業
10/21～25　学校巡回,コンテナー図書室設置、本の配布等
10/28～1/11　学校巡回訪問、本の配布、日本からの船積み受け取り準備等
11/4～8　学校巡回訪問、本の配布、図書委員会生徒と登録台帳記帳作業
11/5　ポートシェプストン図書館に専門書および一般向け書籍15箱寄贈
11/11　ポートシェプストン図書館に追加5箱寄贈
11/11～15　学校巡回訪問、本の配布、本棚設置確認
11/14　モルテン塚田さんとムナフ小訪問と会議
11/18～22　学校巡回訪問、蔵書の分類と本棚への設置等
11/25～26　学校巡回訪問、図書室用物品の配布、図書室設備状況の確認
11/27　日本からの貨物がTAAAオフィスに到着、本の搬入作業
11/28　ムタルメ小で校長およびMOATSメンバーと会議
1/14　モンドリと今期活動計画・準備
1/15～17　学校巡回訪問、図書室状況確認
1/20～24　学校巡回訪問、本・サッカーボールの配布、司書教師研修会案内配布
1/27～31　学校巡回訪問、図書委員会新メンバー確認と再研修、図書室利用者台帳配布、朝礼時に全校生徒への図書室利用案内
2/3～7　学校巡回訪問、図書委員会新メンバーと本の受け入れ登録台帳記帳作業、本の現地購入と配布
2/10～11　学校巡回訪問、本および図書室備品配布
2/12　原山浩司さんと4校訪問、図書活動視察およびサッカー交流
2/13～14　学校巡回訪問、朝会及び集会で全校生徒への図書室利用案内、バレンタインデーイベント等
2/17～18　学校巡回訪問、司書教師研修会準備
2/19　司書教師研修会開催
2/20～21　学校巡回訪問、本の受け入れ登録作業、MOATSメンバーと会議
2/24～28　学校訪問、朝会及び集会で全校生徒への図書室利用案内、蔵書の受け入れ登録作業、ザミサ学区長と会議
3/2～10　久我、大友が南ア現地活動視察訪問
3/11　モンドリと会議、今期活動の振り返りと次期の計画・準備
3/12～13　学校巡回訪問、視察訪問フィードバック、図書室利用者台帳記帳確認の“お知らせ”を配布して図書室内に貼付